

メロンの主産地形成に関する地理学的考察

——静岡県磐田郡浅羽町を事例として——

村 松 千 章

本論考は、浅羽町を含むその周辺の東海地方の市町村に、なぜ、いかにして、メロンの主産地が形成されたかを明らかにするために書かれたものである。浅羽町はガラス温室面積が1,000アールを超え、周辺の袋井市、磐田市、福田町とともにメロンの一大産地である。温室農家の割合も高い。遠州地方のメロンは、なぜといえば温暖な気候と良質の土壌、水に恵まれたため、いかにしてといえば先人のたゆまざる努力によって、特産品としての地位を築き上げてきたものである。東西二大市場の中間に位置するという位置の優位性も忘れてはならない。

メロンは、近年その栽培・消費の増加が著しい野菜（消費段階では果物）である。露地メロンの主な品種はプリンスメロン、アムスメロン、アンデスメロンなどで、主産地は茨城県、熊本県、愛知県、北海道である。温室栽培の高級マスクメロンとしては、網メロンのアールス・フェボリット（Earl's Favourite）が挙げられる。これはさらにいくつもの系統に分けられ、日本の四季に合わせて栽培されている。温室メロンの主産地は静岡、愛知の両県で、栽培面積は全体の80パーセント以上を占めている。遠州地方では、農協の力が強く、種は農協から購入し、季節毎に栽培する品種もすべて決められている。その利点としては、管内のメロンの品質が安定することがある。ていねいに箱詰めされ、農協のマークと生産者番号が入ったシールを貼られ、東西の大市場に出荷される。等級毎に単価が相当異なるため、高級品の生産が目指される。農協の集出荷場では厳しい検査が行われ、品質を落とさないように努めている。

遠州地方のメロン栽培は農協を中心に、値崩れを起こさないよう生産調整をするなどして高級ブランド品としての地位を保ってきたが、ここにきて大きな壁に突き当たっている。不況のあおりを受け、平成4年のクラウンメロン支所（県内最大

の支所）の売上高は前年比11.8パーセント減と大幅な落ち込みとなり、これまで順調だった同支所で初めてマイナスの伸びとなった。メロン栽培は、もはや高度成長の時期を終わり、厳しい安定成長の時期に入ったようである。

これを超えるには、さらに高品質のメロンを作ってゆくほかはないのか、それとも別の方法を選ぶかであるが、前者の方向としては、新しい栽培技術や省力化策も積極的に取り入れられ、最近ではアクリル温室や夏場の冷房、コンピューターによる窓の開閉制御、ミツバチによる交配などが徐々に普及しているという。しかし、それらの設備に多額の投資をできるのは上層の、後継者もいる農家に限られている。メロン栽培は、一棟何千万円もする温室をはじめとして、各種の高価な施設や多額の資材に加えて、冬はかなりの燃料代もかかるうえ、1株に1果しか採れず、毎日の水かけや交配の手間、気の使いようは大変なものである。ある程度高価になるのは当然なのである。しかし、メロンは高価すぎるとの声にも耳を傾けるべき時が来ているのかもしれない。

メロン農家になぜメロン栽培を始めたか尋ねてみると、米だけの農業に行き詰まりを感じたということであった。ではメロン栽培に行き詰まりを感じたとき、農家はどのようにするか。後継者がいないということでもわかるように、農業を離れてしまう場合もあるだろう。かつての本場であるイギリスにさえ見られないほどの見事なメロンが衰退してゆくのはあまりに惜しいが、潜在的な需要は大きい。景気もやがては持ち直すであろうから、現状維持は比較的たやすいであろう。しかし、今以上の発展を望むのは厳しいかもしれない。なんといっても60年の歴史を持つ産地であり、ナンバーワンであるがゆえに後進の安いメロン産地の追い上げが厳しいのであるから、多少の逆風にもめげずに頑張ってほしいものである。